

読まなくても語れる？本のこと

眞鍋由比

伊坂幸太郎の『グラスホッパー』を読んだとき、「その本ってさかさまに読むと『唾と蜜』になるんですよ」という一言が印象的だった。『罪と罰』。日本大百科全書によると世界文学の最高傑作のひとつだそうです。

ロシア帝国の作家ドストエフスキーが1866年に発表した小説。大都市ペテルブルクに住む貧しい学生ラスコーリニコフは、「ナポレオンのような英雄は、人を殺してもゆるされる。それに、金は高利貸しの老婆がもっているべきものではない。もっと有意義な目的のためにつかわねければならない」と考え、高利貸しの老婆を殺す計画を立てる。そして7月のある暑い夕方、実行するが、その後罪の意識に苦しむ。

新しい世代の若者の犯罪と苦悩をえがいて、ロシアで大評判となった。事件の犯人を追うポルフィリー予審判事とラスコーリニコフとのやりとりには、推理小説のようなおもしろさがある。また、小説に登場する多くの貧しい人々の姿が感動的であり、なかでも主人公を改心させてキリスト教にみちびく、天使のような女性ソーニャの純真さが美しい。小学生でもわかる『ボブラディアネット』より

傲慢な貧乏学生が金貸しの老婆を殺す。ここまでではだれでも知っていますね。ある時、クラフトエヴィング商会の二人と気鋭の翻訳家、そして直木賞作家の三浦しをんが四人とも『罪と罰』を読んでいないということに気づいた。なら「読んでないもの同士」で読書会を始めようということに。『『罪と罰』を読まない』岸本佐知子、三浦しをん、吉田浩美、吉田篤弘 文藝春秋2015

四人には最初の1ページと最後の1ページだけ与えられ、途中は少しだけ朗読してもらい、話を進めていく。

映画「逃亡者」のようにラスコーリニコフを追う刑事イリヤがいるのか？第6部からなる大作だけど毎回「Sherlock」のように部の終わりには引きがすごく利いている（連載だったから？でもすごいスピードで書いているけど）、とか。ドストエフスキーは一度は死刑判決を受け、それを何とか助かっている、とかドイツで有り金全部賭け事ですってしまい、無一文で帰ってきたとか、いろいろな情報も読書会のあらずし推理で話題になる。だからドイツ文化に対して冷たいのか（帽子がみっともない、とか）敏腕判事ポルフィリーの嫌疑にはラスコーが論理的に返すけど、ポルフィリーも証拠を出すのではなく、心理的に追い詰めるだけなのが物足りない。二人殺して刑期が7年はいくらなんでも短すぎないか、当時は人権が虫けらのように考えられていたのか、など現代的な観点から意見が出る。一部が一日しか経っていなかったり、時間の描き方も意外な感じ。（ペテルブルグがどの程度の都会だったのか、首都とはどの程度違うのかといった議論もでてきますが、ドストエフスキーの時代はペテルブルグが首都でした。）

そして読んでみてからの感想会では、やはり刑期が7年、二人殺して7年は軽すぎる、いくらふってわいたように、ラスコーリニコフの善行が最後の裁判で主張されたとは言え。またスビドリガイロフが魅力的だということでも盛り上がり、ヴィゴ・モテンセンが、そして妹に振られた腹いせに無実の罪を着せようとしたルージンがスティーブ・ブシェミがキャストイングされたり。ポルフィリーが刑事コロノボだったり、片岡愛之助や松岡修造も役を当てられていました。意外に読んでみると面白かったということですが、この大作を読むのはたいへん。

本校には手塚治虫の『罪と罰』角川文庫1951が入っていたので、それを読むと実に見事に、しかも主人公が美青年であることを踏まえて書かれていて良かった。最後の主人公の告白が革命のさなか、誰にも聞かれないで去っていく結末が原作と違っていて余韻があると思いました。

もちろん読んだほうがいろいろな情報が入り深く考え感じるができると思います。しかし読まなくてもその作品に関していろいろな話はでき、より客観的？（あるいは批判的）、建設的？な意見を述べるができるかもしれない、と感じました。でも時間のあるときに『罪と罰』、光文社古典新訳文庫3巻、読んでみようかなと思いました。巻末に答え合わせのように『罪と罰』の登場人物とあらずしが書かれています。